POLE

北海道ポーランド文化協会会誌「ポーレ」

第５７号　2005.4.8

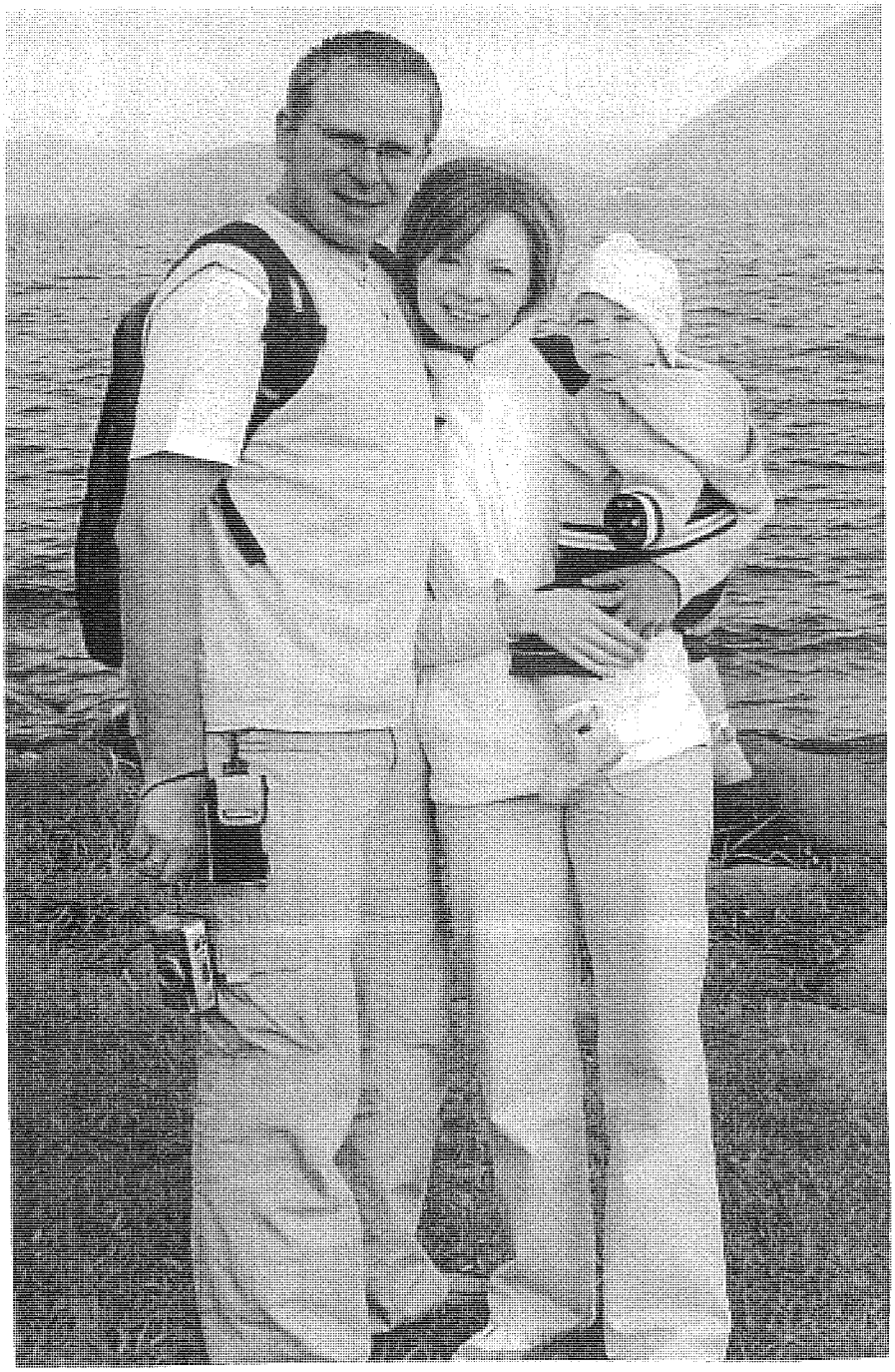
発行
北海道ポーランド文化協会
〒011-0029
札幌市北区北29条西12丁目2－16
佐光伸一
電話・FAX　011-727-1520

新連載エッセイ

ポーランドの道産子

私たちは、大学の勉強を終えてまもなく結婚し、すぐに日本にやって来ました。私たちは若く、これから住むことになるだろう世界と国に対する好奇心でいっぱいでした。始めはここに１年半だけ滞在する予定だったので、子供を作ろうなどという考えが浮かぶこともなく、１年半という時間を、日本のさまざまな場所を訪ね、ひとと知り合い、文化を知ることに最大限使いたいと考えていました。実際その通りになりました。日本での最初の数ヶ月は、学業はもちろんですが、それ以外には主として遊びに時間を費やしました。

ここに後３年残ることになったとき、自分たちの子供を作るという考えが徐々に生まれ始めました。しばらくの間それは単なる将来の計画に過ぎませんでした。私たちは親の役割を果たせるほど成熟していましたが、まったく別の理由で私の方に精神的な準備が出来ていなかったのです。というのも当時の私の日本語の知識は不十分で、このことでいつも不便な思いをしていたからです。そういうわけで勉



強に取り掛かり、いくつかの日本語のコースに登録しました。そして時は流れていきました。

私たちの周りの知り合いの夫婦たちが、子供の誕生という喜びにあふれたニュースをますます頻繁に知らせてくるにつれ、友人たちがもう子供を生む決心をするほど勇気があることに対し、私の中に一種の嫉妬心のようなものが生まれました。というのも私は絶えず怯えていました。おそらくもっとも怯えていたのは、一番近しい家族から遠く離れたよその国で、自分たちだけではうまくやっていけないのではないかということです。しかしついに転機となる日がやって来ました。自分を信じる心を与えてくれたのは、私の日本語の先生でした。あるメールで彼女は二番目の子供をアメリカで生んだと知らせてくれました。彼女も自分の母国から遠く離れ、頼れるのは夫だけで、それに加え小さな子供を二人も抱えていたのです。そのとき私の念頭に次のような考えが浮かびました。この世にはきっと私と同じような状況にありながらも自信をもって立ち向かっている女性が何千人もいるに違いないと。どうして私に出来ないことがあるでしょうか。

私たちが親になると知らされた日は、おそらく長いこと私たちの記憶に残るでしょう。それは大きな喜びでした。この喜びは、子供の将来の計画を立てること、子供の名前を考えること、私たちの小さな部屋に子供用のベッドを入れるために家具の配置を考えることと結びついています。妊娠したということを病院で確認する前に、この嬉しい知らせをポーランドの両親ともう分かち合っていました。すぐに病院に行かねばなりませんでした。一番近い産婦人科がどこにあるかインターネットで調べ、翌日に出かけました。中に入ると、待合室がうす暗いのにぞっとし、患者が全く誰もいないのに驚かされました。それに加えて、私たちが腰掛けたソファーから、眺めた雑誌にいたるまで、ここにあるものすべてが古ぼけていました。お医者さんまでが年寄りで、あまり親切なひとではありませんでした。検診が終わって私たちが医者から耳にしたのは、「おめでとうございます」というお決まりの表現ではなく、「産みたいんですか」という質問でした。「一体何を聞くの！」と私は思いました。「こんなに長年にわたる経験豊かな医者が、自分の患者の顔からこの喜びの表情を読み取れないなんて一体どういうこと！」。私たちがあらかじめカルテに書いておいた質問に対しても面倒くさそうに、短く答えただけでした。自分が妊娠したということ以外何も知ることが出来ませんでした。それどころかこのクリニックを出ながら、以前にもまして疑いと恐怖の念を感じ、震えながら確信したのです。「日本でなんて産みたくないわ！」

続く…

Edyta Rzepka エディータ・ジェプカ

訳　佐光伸一

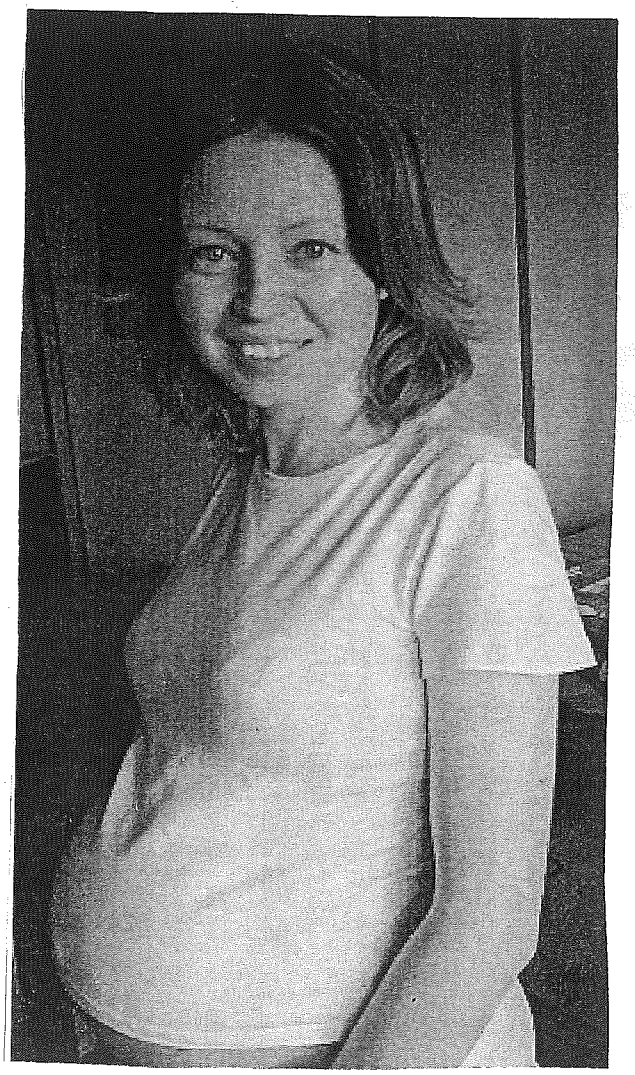
ポーランドの道産子　第二回

エディータ・ジェプカ

おさらい

ポーランド人の夫の留学により札幌にやって来てしばらく経った後、子供を作るという希望と決心がようやく生まれる。日本で出産することに不安があったが、妊娠後訪れたクリニックで医者から「あなた本当に生みたいんですか?」と質問されるような冷たい対応を受け、その不安は一層強まる。

「日本でなんか産みたくないわ!」「イヤよ!」初めて病院を訪れた後、私はこういう風にしか考えられませんでした。主人はいつものように私を慰めてくれます。「大丈夫だよ。知り合いに聞いたり、インターネットで調べたりして、いいお医者さんや居心地のいいクリニックを見つけようよ。」しばらくしてようやく日本にはふたつのタイプのクリニックがあると知りました。つまり産婦人科と婦人科です。それまでそんなことなど知りませんでした。最初に私たちが探し出したのは「間違った住所」、つまり婦人科のクリニックだったのです。だから多分お医者さんは少し不親切だったのでしょう。もうこれ以上ここに来ないようにそうやって私たちに分からせようとしたのかもしれません。でもどうして直接そう言ってくれなかったのでしょうか? 分かりませんが単にそんな性格の人だったのかもしれません。いずれにせよ妊娠した女性でこんなクリニックとこんなお医者さんのところに行きたがるひとなんていないに違いありません。私も行きたくありませんでした。だから一ヵ月後の次の検診までには知り合いに落ち着いて聞いたり、インターネットでいろいろなクリニックを探したりして自分たちの考えで一番いいところを選ぶ時間がありました。今回の「探索」では、札幌在住の女性がいろいろな病院での自分の体験を書いているインターネットのディスカッション・フォーラムを見つけました。簡単に言えば、そこでは病院や具体的なお医者さんを他の女性に勧めたり思いとどまらせたりしているのです。そのフォーラムを読み、日本で女性は麻酔を受けて出産することは稀で、出産の時、麻酔をしてもらえる病院は札幌には多くないと初めて知りました。私にはこのことは非常にショックでした。というのもヨーロッパやアメリカでは出産時の麻酔は非常に一般的で、およそ半分の妊婦が麻酔を利用しているからです。ポーランドでも同様で、出産時には麻酔を「希望」しそれを受ける(有償で)ことが出来ます。私は以前に一度も出産をしたことがなくそれがどんな痛みかも分からなかったので、麻酔を受けることが出来るところをえらびたいと思いました。ディスカッション・フォーラムのリストの中で他の女性に評判のよく、家の近所にあり、麻酔を受けられるとなると、残ったクリニックはたったひとつでした!やがてそこに出かけました。他に選択の余地がないという心理的な思い込みがそうさせたのかもしれませんが、その病院はすぐに気に入りました。入り口をくぐるとすぐに自分が病院ではなくてまるでホテルにいるのではという印象を受けました。清潔で、広々としていて、明るい色にあふれ、静かで、スピーカーからは落ち着いた音楽が流れ、接待も気持ちよく、このクリニックのことを良く言う患者さんもたくさんいました。お医者さんも若くて愛想が良く、外国人の訪問に驚いた様子もありませんでし



た。この病院ではよく外国人が出産しているようにも見えました。次の患者さんが列をなして待っているというのに、私の質問に辛抱強く答えてくれました。後で私は助産婦さんと話をすることになり、私にいくつか質問をして私の疑問にさらに答えてくれると教えてもくれました。助産婦さんの説明のなかでひとつのことだけが私にはショックでした。彼女は私の体重を量ったあと、何か自分のノートのようなものを見て、私はこの妊娠中に九キロ、最高でも十キロしか太ってはならないということでした。最初は笑顔でこのことを受け止めました。でも後になってこれが日本ではいかに大事なことなのか、どれほどきちんと管理しているかがわかりました。おそらく多くの女性が妊娠中に体重が増えすぎて、あとでその余分な目方を減らすのが大変だからでしょう。それ以外にも助産婦さんは話の間に私の頭に浮かんだ質問に答えてくれました。この会話のことをとてもよく覚えています。彼女はあまりにも親切だったので、こんなクリニックと彼女のようなひとの看護のもとでなら私はすぐにでも産みたいともうその場で彼女に言ったほどでした。

第５０回北海道ポーランド文化協会の報告

２００５年７月１６日（土曜日）北海道ポーランド文化協会第５０回例会としてポーランド料理講習会が札幌市男女共同参画センターの料理実習室で開かれました。講師は「ポーレ」の連載エッセー「ポーランドの道産子」の著者でおなじみのエディータ・ジェプカさん。メニューはGolapki(ポーランド風ロールキャベツ)とカッテージチーズ入りクレープでした。当日は2名のポーランド人を含む21名の方がお集まりくださいました。「Golapki(鳩)」という名前の由来は、現在ではロールキャベツの中にお米が入っているが、ポーランドにお米がなかったときにカーシャの実を入れており、カーシャは鳩の好物だったので、このような名前になった」 とのエディータ先生からのお話から会は始まりました。料理が始まると通訳を介しての説明にもかかわらず、皆さん先生もびっくりするほど見事にポーランドの家庭料理を再現していました。料理後の試食会では予想以上の出来に満足し、大盛況のうちに会は終了しました。

北海道ポーランド文化協会では十二月ごろに今度はポーランドのケーキの講習会を予定しています。

次回も多くの皆さんの参加をお待ちしています。

連載エッセイ
ポーランドの道産子　第3回
エディータ・ジェプカ

「妊娠したと区役所に届け出ないといけませんよ」と言われるのをわたしは耳にしました。「わたしがですか？」と驚きました。「はい、奥さんか、奥さんのダンナさんがです」。日本では個人的に役所に行き、役所のひとの前に立って「こんにちは、わたし妊娠しています」などと告げるとはまったく知りませんでした。ポーランドではお医者さんが「妊娠カード」なるものを作り、わたしの知る限り妊娠した女性はそのカードに関し何もしなくてもいいのです。お医者さんでさえ妊娠の事実をどこにも知らせることはしないのです。しかし行く必要性があるというので、行って来ました。区役所では「母子手帳」と妊娠の経過についてのいろいろなアドバイスの書いた小冊子を貰い、およそ二ヶ月間の「母親教室」へと招待されました。授業は退屈な講義などではなく、遊びやコンクールや体操、食事のアドバイスなどがありました。ある授業ではパパたちも招待されて、赤ん坊代わりの人形を一緒にお風呂に入浴させることを学びました。一度、人形が浴槽の底に沈み始めたときには、主人と一緒に肝を冷やしました。この出来事のせいで緊張したあまり、この時以来、赤ん坊をはじめてお風呂に入れるのは出産そのものよりも難しいのでは、と思い込んでしまうほどでした。もっと楽しい出来事の中で覚えている授業は、「先輩ママ」が自分の小さな赤ちゃんを連れて来てくれて、その子を手やひざに抱いて、抱き寄せることが出来たときでした。その時、わたしももうすぐ自分の子供とこんな集まりにやって来るのだと思い、その瞬間を待ちきれない思いでした。

でもおなかは私が望んだようには早く大きくはなりませんでした。子供を待ち受けているようには長い間見えず、それに加え気分もとてもよかったので、日本語の授業に通ったり、知り合いに会ったりしていました。毎月定期検診のためにお医者さんのもとにも出かけました。この訪問がわたしは大好きでした。というのも毎回、超音波検査で私たちの息子を見ることが出来るからです。ここにも日本とポーランドの新しい違いがありました。ポーランドでは多くの他のヨーロッパ諸国と同様に定期検診は妊娠期間中全体にわたって3回しかありません。それは子供の安全を考慮してのことだそうです。本当にそうなのでしょうか？私には分からないので、これ以上深くこの問題には立ち入らないことにします。ただ日本の女性はこんなに何度も超音波検査を受けているけど子供は健康に生まれているし、私の子供にも害はないんだと自分を納得させました。それに加えわたしたちの病院にはその当時札幌では一番いい超音波検査の機器がありました。いわゆる三次元（3D）システムです。これは自分の子孫を見る楽しみをさらに倍増させてくれました。今でもこの写真は思い出にとってあります。

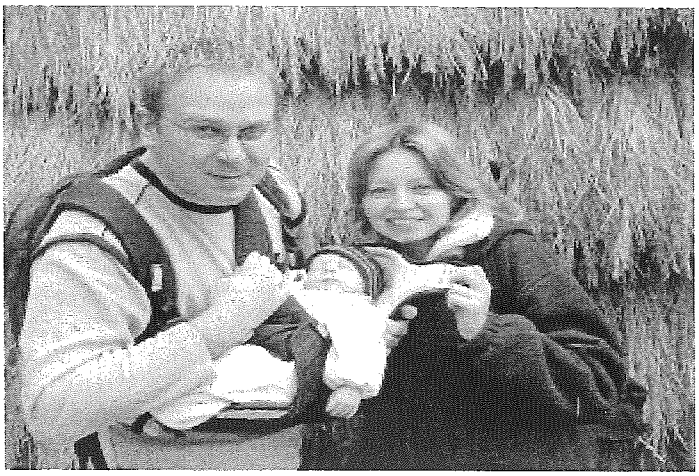
しかし残念ながらこの楽しみは妊娠の最後の瞬間までは続きませんでした。出産の二ヶ月前に痛みが表れ、ベッドに横になることを余儀なくされたからです。病院で点滴を受けながら三日過ごし、病院を出るときお医者さんは、家で「全く」何もしないことを条件にのみ、家に帰ってもいいと言いました。それはとてもつらい時期でした。とりわけわたしの主人にとってはそうでした。というのも彼は学問と翻訳以外にも掃除や洗濯、料理つまり家の全ての仕事をしなければならないのです。出産の二週間前に彼のお母さんが来てくれてようやく、胸のつかえがとれました。これでわたしもホッとしました。新しい家族のメンバーを迎える準備がまだすべては整っていなかったからです。義理の母はすべての仕事を引き受けてくれ、わたしは安心して「その瞬間」を待ちわびることが出来ました。このようにしてわたしはある朝、強い痙攣を感じました。主人を起こし、口には微笑みを浮かべていましたが、軽い恐怖の念とともにこう言いました。「始まったわ！」

つづく…

ポーランドの道産子　第四回

エディータ・ジェプカ

「恐怖は大きな目をしている」という、ことわざがポーランドにはあります。それは「わたしたちが怯えるものは、実際にはそれほど恐ろしいものではない」という意味です。出産もその通りでした。時間という距離を持って眺めると、この出来事も楽しく思い出すことが出来ます。しかしその時わたしたちは少し怯えていたのも確かです。というのも私たちにとって初めての体験でしたし、そこに何が待ち受けているか分からなかったからです。しかしそれほど悪いものでもありませんでした。それは暖かい周りの雰囲気と、結局使うことにした麻酔のおかげです。出産はとても長くかかりました。全体で一六時間も続きました。しかし痛みにのたうつこともありませんでしたし、以前見た映画で女優がしていたように「痛い、痛い」と叫び声をあげることもありませんでした。もし誰かがこの日の私たちをカメラに収めたとしたら、それを見た一体何人がそれが出産の様子だと分かるでしょうか。おしゃべりをしたり、テレビを見たり、食事をしたりしているうちに何時間も過ぎました。麻酔を使うとは、多くの女性の目には私は弱い女性いと映ったことでしょう。でも次に出産することがあったとしてもこの方法で産みたいと思います。



私たちの息子は、父親と同じように、ちょうど真夜中に生まれました。健康な子でした。でもポーランド人の子供としては少し小さい二八〇〇グラムでした。ポーランドでは新生児の平均的な体重は三三〇〇-三五〇〇グラムなのですが、日本の基準に従えば、二八〇〇グラムというのは標準で、何も心配することはないと知りました。

病院では六日過ごしました。日本では産後には普通それくらい過ごすからです。ポーランドでは普通、二、三日です。ポーランド人の私の友達は、「そんなに長いこと病院にいるの？」と驚いていました。しかし私はもっと長い間でも大丈夫でした。というのもそこは安心感を与えてくれて、専門的な手助けをし

てくれて、それに加えて主人が仕切りのある部屋にわたし達と一緒に朝の八時から夜の九時までいれるからです。病院にいたとき主人は、区役所で子供の届けに関する手続きをすべてしてくれました。日本のお役所体質について多くのひとが非難していますが、私たちは嘆く理由などひとつもありませんでした。すべてが迅速に円滑に進みました。私たちの息子にはMikolaj（ミコワイ）という名をつけました。この名前がとても気に入りました。真ん中にはポーランド語にしかない「という文字が入っていますが、将来はこのことが問題にはならないと希望を持っています。というのも父親も名前がこの同じ文字「で終わっていますが、そのことで文句は言っていません。長い名前にしなかったのは意識してのことです。それが日本ではいろいろと面倒くさいことになると思ったからです。

病院を出る時、看護婦さんたちは記念写真を撮影した後、両親にとって家での最初の夜は大変だろうけど、すべて大丈夫で何も大事はおこらないと言って私たちを安心させてくれました。ミコワイに関しては看護婦さんたちのおっしゃるとおり何も問題がありませんでした。しかしそれとはまったく別のことが起こりました。朝、恐ろしいくらい大きな地震があったのです。北海道ではこのような地震は五〇年以上もなかったというぐらい大きなものだったらしいです。私たちと一緒にいてくれた主人のお母さんにとってこれは初めての経験でした。最初はどの地震もこんなものだと思い込んでしまったそうです。そんなことないと教えてあげると、ほっとしたようです。お母さんはわたしたちと一緒に六週間いてくれて、家事で私をとても助けてくれました。掃除、洗濯、料理をしてくれて、お祝いの言葉を言いに友達が来てくれた時には、おいしいポーランドのケーキを焼いてくれました。私はその時、休むことが出来て力を取り戻しました。空港までお母さんを送りに行った時、このすべてが自分にのしかかってくると分かりました。でもその時はすでに「自分で何とか出来るわ」という自信がありました。

（訳・佐光仲一）

最近のポーランド　ラファウ・ジェプカ編集

○経済（Gospodarka）

●「ポーランド経済が上げ潮だ」

双子の総理大臣と大統領の人気が低いままだが、ポーランド経済が上げ潮だ。

第一四半期（一月―三月）に五・一％（前年同期比）の成長率を記録したのに続き、第二四半期は五・五％に達した。

●「渡英しても仕事がみつからず」

EU拡大後に多くのポーランド人がよりよい生活を求めて英国に移住。しかし、英国には来たものの、仕事がみつからず、収入がないためにホームレスとなってしまうポーランド移民が約三〇〇〇人もいる可能性が高い。

●「日本の企業がポーランドを選ぶ」

東芝がヴロツワフ郊外・コビエジェツェ、シャープがトルニで液晶テレビに必要な部品の工場を稼働した。JETROによると2006年に日本の資本金の企業が130社を超えてきた。

○文化（Kultura）

●「鈴木さんが二位　ポーランドのコンクール」

ポーランド西部ポズナニで行われた第一三回ビエニアフスキ国際バイオリンコンクールで、桐朋女子高校音楽科二年の鈴木愛理さん（一七）＝東京都出身＝が二位に入賞した。

○スポーツ（Sport）

●「ポーランド男子バレー世界二位」

日本で行われたバレー世界大会でブラジルに負けて二位。ホテルの子約がちゃんと入っていない、ちゃんとした場所で練習をさせない、テレビのカメラが日本人選手しか見せてくれない、日本のコーチは礼儀が正しくない、というようなクレームはポーランドのメディアに取り上げられる。因みに日本を批判する記事やニュースは非常に珍しい。

○面白ニュース（Ciekawostki）

●「新記録？」

北西のポーランドのシチェチン市で七・一三〇kgの赤ちゃんが産まれた。六六cmのカツペル君がとても元気な四人目の子供として誕生した。

提供：河北新報、F1Racing.jp、CNN Japan、ZAKZAK、東京新聞、ジャーニー、スポーツニッポン

ポーランドの道産子　第5回

エディータ・ジェプカ

ミコワイは私たちにとってはじめての子供だったので、私たちには子供を育てることの経験が欠けていました。このことを私たちは子育ての本やインターネットから学び、自分たちの両親からもいろいろ教わりました。でもこのことは読んだり教えてもらったことから自分たちが子育てに上達したとは思いません。一番大事なのは親としての本能だということに気づきました。

ポーランドと日本の「子育て」の方法にはお互い異なることがよくあります。でもそのどちらも否定することなく自分の息子のために最もよい方法を本能的に選択するように心がけています。例えば、ポーランドでは生後一週間でもう赤ん坊を外に連れ出しますが、日本では子供に免疫力がつき産後の若い母親の体力が回復するまで一ヶ月の間待つことがよいとされています。ポーランドでは赤ん坊の耳を守るために頭に帽子をかぶせることに気を配ります。日本では冬でも頭がむき出しの子供をよく見かけます。服装ひとつをとってみても日本とポーランドでは違います。

ポーランドの母親は子供を出来るだけ暖かくしようとしますが、日本では出来るだけ軽くしようとします。日本では一年中はだしの子供をよく見かけます。ポーランドの赤ん坊は生まれてすぐに子供用のベッドでひとりで寝ることが習慣づけられます。ひとりで寝つきベッドでひとりで過ごす子供は、両親の自慢のもとです。日本では子供は両親と寝ます。ミコワイはと言うと、自分のベッドを持っていますが私たちと一緒に寝ています。私の女友達にポーランドでは赤ん坊がひとりで寝ているといった時の、「ひど～～い！」という彼女たちの反応を今でもよく覚えています。

またミコワイがこんなによくぐずり泣き虫なのは歯が生えはじめ、それがとても痛いたからだと私が言った時、知り合いは驚いた顔をして私を見たものでした。生えはじめの歯の話しをした時には、小児科医の先生までが「それが痛むというんですか？」と驚いたように聞き返しました。日本の子供はそれが痛くないんだと、逆に私たちがビックリして考え込んでしまいました。というのも歯が生えはじめるとそれは子供に痛みを与え、だから子供はよく泣いた

り、時には熱を出すこともあると、ポーランドでは考えられているからです。ポーランドの薬局ではこの痛みを和らげるために子供の歯茎に塗るための特別の塗り薬まで販売されているくらいです。

子供の歳の節目に関する伝統も日本とポーランドでは異なっています。日本では子供が生まれてから百日目に神社を訪れ記念写真を撮ります。ポーランドではそれに相当するのが子供の洗礼ですが、それは正確に生後百日目ではありません。子供の最初の離乳食は日本ではちょっとした事件で赤ん坊は小さなスプーンやフォークなどのプレゼントを手に入れます。ポーランドの家庭ではそのような小さな事件は最初の歯が生えた時です。でもポーランドの子供はプレゼントはもらいません。ただ両親がそれを見るだけです。その代わり子供の一歳の誕生日は、家族中が集まる大事件です。たくさんのプレゼントをもらいケーキの最初のローソクを消すだけでなく、子供は将来何になるかを占われます。子供の前にさまざまな物が並べられます。例えば本に手を伸ばせば将来は学者、硬貨なら金持ちという具合です。ミコワイは最初の誕生日を、ちょうど同じ日に生まれた「なつみ」ちゃんと一緒に祝いました。私たちの日本人の友達はこの占いにとても興味を持ち、子供の前にいろいろな物を並べました。ミコワイはすぐに体温計に手を伸ばしました。将来は多分お医者さんになると私たちは考えました。みんな興味を持って「なつみ」を見ていると、彼女はなんとウォッカのグラスを手に取りました！　彼女の将来が酒飲みになると予言したポーランドの占いを彼女の両親が気に入ったかどうか気になるところです。

編集部よりのお知らせ。

皆さんも「ポーレ」に原稿を投稿してみませんか？　「ポーレ」ではポーランドに関する皆さんの原稿をいつでも大歓迎です。ポーランドに旅行した際の体験、ポーランド人との出会い、ポーランドに関するさまざまな蘊蓄などをぜひお聞かせ下さい。詳細は事務局までお問い合わせ下さい。

会費の納入はお済みですか？

2007年度（2006年 10 月～2007年 9 月分）

当会は、皆様からの年会費によって運営されています。
上記の年度分の会費の納入を宜しくお願いいたします。

《郵便振替口座》
02740 － 5 － 19735
北海道ポーランド文化協会
普通会員（年　額）　3,000円
維持会員（年額1口）5,000円
学生会員（年額）　1,500円

《会費振込銀行口座》
北洋銀行 大通支店
（普）301-0605084
北海道ポーランド文化協会
事務局長佐光伸一

「ポーレ」編集委員会　越野剛・小林美保・佐光伸一・鳴神雅史・ラファウ・ジェプカ
（事務局）
〒001-0029　札幌市北区北29条西12丁目2－16
コーポラス阿部7号　Tel/Fax 011-727-1520　e-mail：ssamitsu@hotmail.com

ポーランドの道産子

エディータ・ジェプカ

ポーランドの公園に遊んでいるお子様を見かけたことがあるでしょうか。そこは、ポーランド人の集まりの場所でもあります。

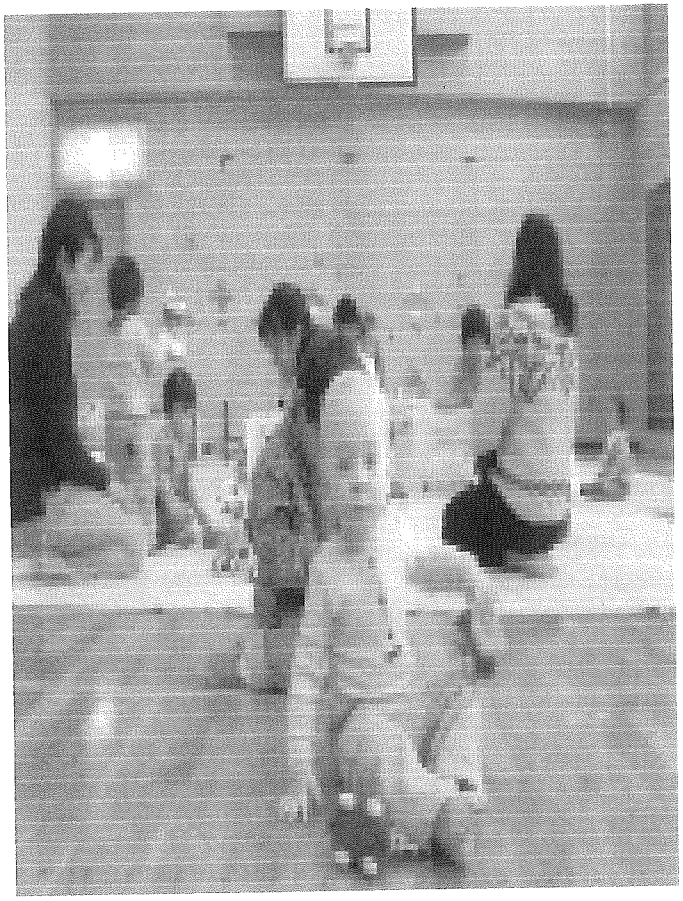
ご存知の通り、ポーランドでは子供が生まれてから学校に入るまでの間、ほとんどの子供は家庭で育てられます。そのため、ポーランドでは子供を持つ家庭に対する公園の設置や、子育て支援のための様々な制度が充実しています。

ポーランドの公園は、子供たちが遊ぶだけでなく、お母さんたちが集まって情報交換をしたり、お子様同士が仲良くなったりする場所でもあります。

ポーランドの公園デビュー

ポーランドの公園デビューということを考えると日本の子供と一緒に知らない他の母親に話しかけ、そこで公園に出かけてみました。

しばらくすると日本人の母親が来て、自分の子供と一緒に遊ぶようになりました。



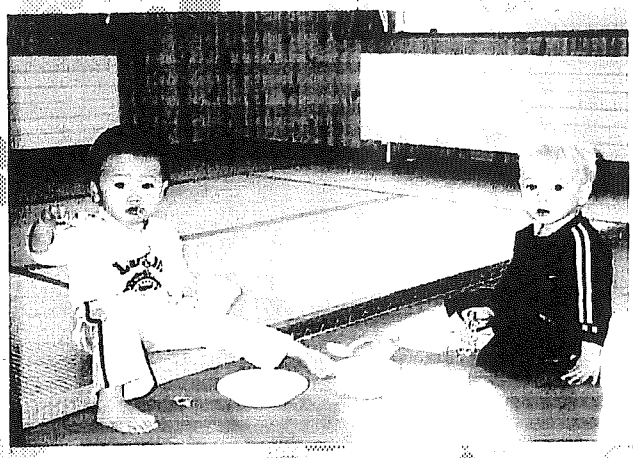
「児童会館」の集まりに出かけてみました。公園に通うようになった頃、「ジドウカンの集まりがあるよ」と知り合いになることにそんな重要な意味があるとは知りませんでした。

ポーランドの道産子

エディータ・ジェプカ

ミコワイがまだ小さく、一日のほとんどの時間を一緒に過ごしたときのことを、今でもなつかしい思いで憶えています。一緒に児童会館や公園に通ったり、家で遊んだりしました。しかしミコワイが一才六ヶ月だったとき、もう一度北海道大学でポーランド語を教えないかと提案され、迷わずそれを引き受けました。というのも三年前にポーランド語の授業を行い、教えるのがとても好きだったからです。しかしその授業は知人の佐光伸一さんの大きな助けがありました。私がポーランド語で話し、彼が私のことばを学生に対し日本語に通訳してくれました。しかし今度はもうひとりだけで、そして日本語で授業を行わねばなりません。再び私は日本語学校のコースに登録しました。そこで私が学び働いているとき、ミコワイをどうするかという問題が生じました。

ポーランドでは家庭の経済的事情から女性は働くことを余儀なくされています。もちろんまったく働く必要がないのに、単に働きたいから働いているポーランド女性もいます。そのような女性は出産の数ヶ月前まで働きます。出産後、若い母親には十六週間の有給の産休を取る権利があります。その後、女性は職場に戻るかあるいはいわゆる育児休暇を取るかします。育児休暇は三年間取ることが出来ますが、残念ながら無給休暇です。したがって現在のポーランドでは母親が育児休暇を取るのは稀で、ほとんどの場合十六週間の産休の後、職場に戻ります。そしてそこでも幼い子供をどうするかという問題が生じます。ポーランドではこのような状況では三つの選択肢があります。第一にもっともよく行われているのが、おばあちゃんが毎日孫の面倒を見るということです。そうすると両親が働くことが出来るからです。もしおばあちゃんが手伝えない場合、たとえばおばあちゃん自身が働いている場合、あるいは遠くに住んでいる場合、二番目の多いのがベビーシッターを雇うことです。最近ポーランドではベビーシッターという仕事はとても人気があります。それは学校や何かのコースで勉強しないといけないような仕事ではなく、ポーランドではどんな資格も持たず誰でもなることが出来ます。新聞に広告を出せばいいのです。ベビーシッターになるのが最も多いのが、仕事を持たな五十才前後の女性です。こういったベビーシッターは、面倒を見る子供の家に通い、両親が帰ってくるまで一緒にいてくれます。もちろん子供と遊び、食事の世話をし、一緒に散歩にも行ってくれます。三つ目の選択肢が、〇才から三才までの保育園です。しかしポーランドで保育園はあまり評判がよくありません。もし若い母親が職場に戻らなければならないなら、おばあちゃんに預けられることが一番多く、そのつぎがベビーシッター、最後に保育園です。



わたしたちの日本での状況の結果、ミコワイを保育園に入れざるをえませんでした。というのもおばあちゃんはわたしたちと一緒にはいないし、ベビーシッターはここでは人気がありません。そのとき、日本には幼稚園（三才から六才までの子供、ポーランドの幼稚園と同じ）そして保育園（生後一ヶ月から六才まで、つまりポーランドの保育園と幼稚園をひとつにあわせたもの）があることを知

りました。地域の役所に、夫が働き、私も働き勉強をしているという届けを出し、保育園を選べばいいだけです。私たちの住まいの近くには三つの保育園がありました。その三つの保育園に出かけ、そして園長先生と話し合った後、その内のひとつに決めました。それは一番遠くにありましたが、私たちにはそこが一番いいように思いました。最後の瞬間まで、つまりミコワイがはじめて保育園に行く日まで、私はこの決断が正しかったのかどうか、私たちの子供はまだ幼すぎないかなど大きな不安にとらわれ、悩みました。しかし私たちの心配はまったくの杞憂だったと後で分かりました。四月になり私は仕事と勉強に戻り、ミコワイは自分の人生の新しいステップを始めました…

次回コンサートのお知らせ

昨年五月の二十周年記念コンサートでは、会員の皆様に多大なご協力を頂き、ありがとうございました。当協会では、今後も毎年一回のコンサートを開催し、ショパンなどポーランドの作曲家の作品、また広くポーランドに関わりのある作品を演奏、紹介してゆく予定です。また皆様から、演奏曲目についてのご要望、演奏のご希望など随時受け付けておりますので、どうぞお気軽にお問い合わせ下さい。さて、次回のコンサートですが、下記の日程で準備中です。皆様のご来聴をお待ちしております。

時：二〇〇九年五月二十九日（金）六時開演予定

所：札幌サンプラザホール（札幌市北区北二十四条西五丁目）

プログラム：ショパン、リャードフなど（現在チラシを印刷中です。詳しいプログラムはチラシをご覧下さい。）

北海道ポーランド文化協会の皆様へ

〇八年五月、ポ文協創立二十周年を記念して音楽関係の会員に拠る演奏会を致しましたところ、運営委員の皆様を始として会員の皆様の絶大なるご協力の下、成功裡に終える事が出来、本当に有難うございました。

これを機に、会員に拠る演奏会の定期化が決まりましたが、何分にも演奏会実施には長期に亘る準備期間と多額な金額が必要となります。そこで、ポ文協演奏部門として演奏会準備委員会が中心になり企画運営し、基本的には独立採算を目指す方向でお願い致しましたところ、運営委員の皆様に御賛同頂き、総会でも御了承頂き、早速来年の準備に入りました。

演奏部門等大袈裟な名前が付きましたが、あくまでもポ文協の活動の一部で有り、会員の皆様のご協力無しには充実した演奏会には出来ません。くれぐれも会員皆様の暖か間御支援、ご協力を御願い申し上げます。

北海道ポーランド文化協会・演奏会準備委員会一同